

頒布版

烏尾山 仲尾根 物語

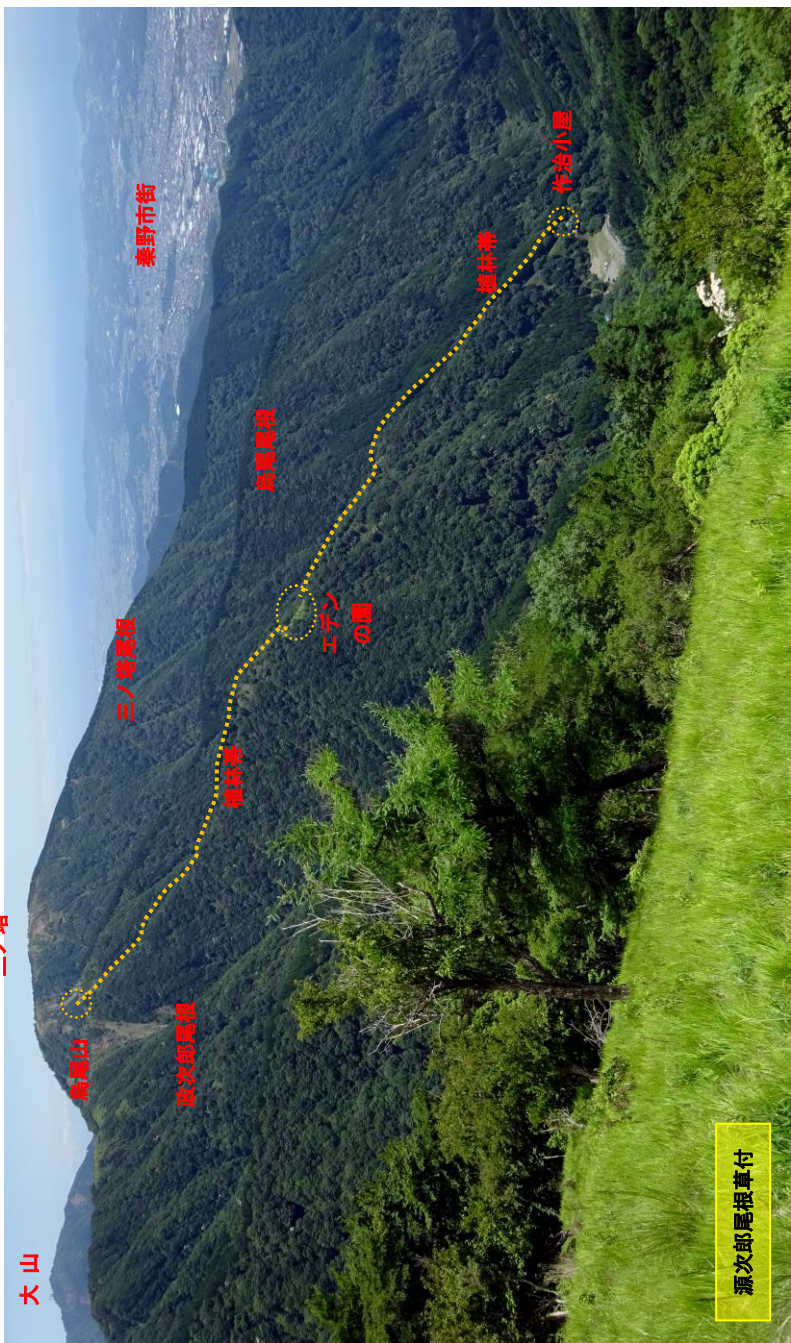
作治小屋とエネンの園



田中文夫

鳥尾山 仲尾根 全景

三ノ塔



源次郎尾根草付

作治小屋の全景

2018.06.30





源次郎尾根から見下ろす **作治小屋** 2018.06.30



作治小屋 からの眺望は **丹沢の上高地** 2018.06.30



作 治 小 屋



小屋の津々木さん

本 館 (宿泊定員 24 名)



作治小屋利用料金 一般利用者の宿泊まり料金 (各1名様)		作治小屋販売料金	
・ 大人	2,500円	・ 缶ビール	300円
・ 小学生	1,000円	・ 発泡酒	200円
・ 寝袋持参	1,500円	・ ジュース	150円
・ テント持込	500円	・ カップ麺	200円
・ 駐車料金	500円	・ ドリップコーヒー	200円

連絡先：099-1299-1424(津々木)
099-2400-9474(下道)



新 館

バーベキューコーナー

野外テーブル

新 館 (宿泊定員 10 名)

作治小屋の秘密再発見

昨年(2017年)で60周年となった“作治小屋”。

私は18歳の時から小屋の前を通り過ぎていたので、もう54年も前のことになります。当時は夜中に小田急線＝渋沢駅から歩き出し、ヘッドランプを点けて大倉までの曲がりくねった畦道を、最短めざして歩きます。半世紀が過ぎた今は家が建ちならび、田畑は縮小され、どこを歩いていたのか定かではありません。

大倉から水無川河原に向かい、坂道を下ります。堰堤わきのちよっと岩が露出したところを乗り越し、河原に降り立つ。飛び石伝いに水無川を渡り、対岸の藪を急登して戸川林道に立ちます。

ヘッドランプを点け、戸川林道を歩くこと約1時間で作治小屋に到着。沢登り専門だった私たちは小屋に見向きもせず、戸沢の河原にツェルトを張って仮眠、アルプスの岩壁を夢見ていました。

明るくなると沢登りへ出発。一人で、あるいはパートナーと一緒に、くまなく沢を登り尽くします。登り終わるとモミソの懸垂岩に誰・彼となく集まってくる。最初は少し岩を登り、バランスクライミングを披露した後で、交流と情報交換の世間話。このような半世紀前、作治小屋はあっても目に入らない、スルー状態でした。

それから50年、老体の健康登山で丹沢に還ってみると、今なお続く作治小屋スタッフから、“お茶飲んでってヨ！”の声に誘われ、ようやく立ち止まりました。そこでは、若きアルピニストの頃に気づかなかった**作治小屋の秘密**を、再発見したのです。

“人生”という沢の流れに“淀む”登山者の“隠れ家”、

そして“英知の宝庫”であった…と！！

2018年7月 田中文夫

烏尾山仲尾根発見

“烏尾山仲尾根”に初めて踏み込んだのは2014年11月15日。作治小屋の津々木さんから、「仲尾根はイイヨ・・・！」と幾度も聞かされていました。しかし入口の植林帯は薄暗く、陰気な感じなので立ち入る魅力にかけます。三ノ塔から烏尾山へ至り、山頂から下降を試みたのですが、新茅ノ沢に入り込み、引き返します。初めてのルートは、先に登ってから降るのが鉄則。降るほうが難しいからです。2014年11月27日、初めて仲尾根を登りました。

入口の道標から、植林帯の暗くて急な斜面を登り終えると打って変わり、明るくて丸みを帯びた落葉樹林の尾根が開けます。もう一段上の植林帯を抜けると、第2の道標がある。道標の先は芝状の草原が広がり、周囲の展望が拓けます。

丸みを帯びた落葉樹林と浮石混じりの芝状草地を登り切ると、太くて高い老松が茂り、第3の道標があります。その先には、アツと驚く見事な草原斜面が拓ける。三ノ塔尾根～表尾根～塔ノ岳～大倉尾根の屏風に囲まれた、急傾斜な草原陽だまりは、**宇宙エネルギーを感じるパワースポット**。古代文明発祥の地＝シュメールでは、河口の肥沃な草原を“エデン”と呼んだそうです。それにあやかり、私はこの草原を“**エデンの園**”と呼んでいます。ユダヤ教「聖書」からの引用ではなく、私独自の解釈からです。

エデンの先、上部植林帯は杉林のプロムナード。さらに丸みを帯びた落葉樹林の細尾根を過ぎ、稜線までの急登はノイバラやカヤトをかき分けますが、今ではしっかりとトレールが残ります。

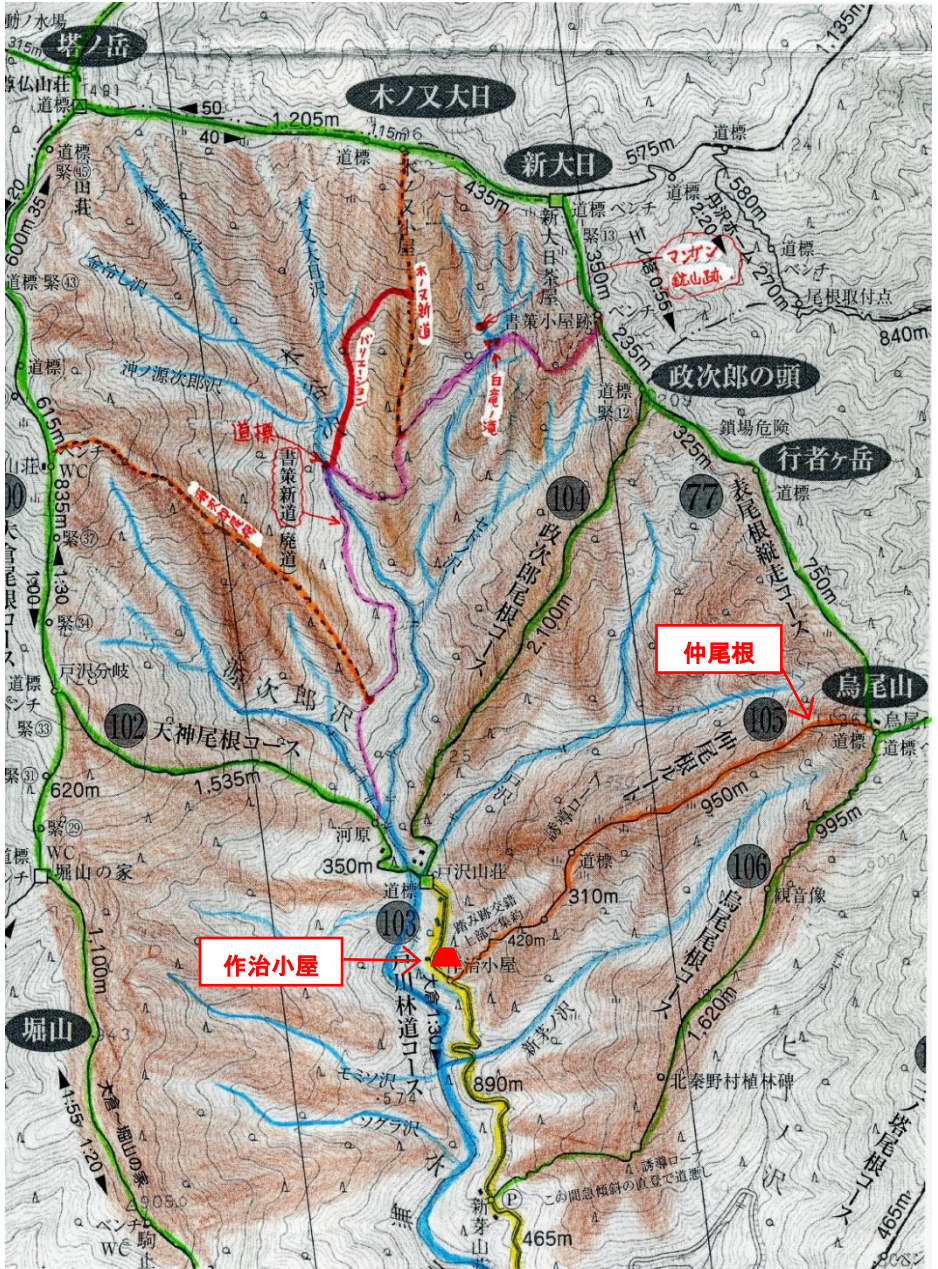
仲尾根は丹沢で、私の一番好きなコースとなりました。

2018年7月 田中文夫

表丹沢航空地図 Google より



水無川周辺地図



季節で変わる 烏尾山 仲尾根

春の仲尾根 2017.05.20



冬の仲尾根 2015.03.03



夏の仲尾根

2018.06.30



雪の仲尾根

2018.02.03



もくじ

写真（烏尾山 仲尾根 全景）	3
（作治小屋の全景）	4
（源次郎尾根から見下ろす 作治小屋）	5
（作治小屋 からの眺望は 丹沢の上高地）	5
（作治小屋）	6
作治小屋の秘密再発見	7
烏尾山仲尾根発見	11
表丹沢航空地図	9
水無川周辺地図	10
季節で変わる 烏尾山仲尾根	11
もくじ	13
1. 冬枯れの仲尾根（2014.11.27）	14
2. 雪の仲尾根（2015.02.07）定年退職後のご夫婦山行	30
3. 冬の雨氷樹（2016.01.31）めずらしき雨氷樹	39
4. 快晴の冬姿（2017.01.22）	42
5. アメリカ縦断途上で死亡した森田利佳さん（2017.04.03）	47
6. 作治小屋祭りと霧雨の仲尾根（2016.06.05）	57
7. 春の草原（エデンの園）下降（2018.06.09）	65
8. 霧の草原（エデンの園）登る（2018.06.17）	71
9. 小学5年生親子を案内（2015.07.12）	81
10. 晩秋の仲尾根（2014.11.15）	86
11. 初秋のタマゴ茸（2015.09.06）	100
12. 作治小屋の太陽光発電LED照明（2017.06）	102
日本山岳文化学会有志 「山岳文化講座と作治小屋の夜」 2018.04.07～08	
作治小屋の太陽光発電LED 照明を祝う集い 2017.07.22～23	
あとがき	107
著作一覧、主要登山歴	108

1. 冬枯れの仲尾根 (2014.11.27)

【NO-01】 作治小屋の手前約 20m、最初の道標から植林帯を登り始める。



【NO-02】 植林帯を抜けると落葉樹林の丸みを帯びた尾根となります。



【NO-03】 ふたたび植林帯斜面を登る



【NO-04】 植林帯の終わりにある2番目の道標（鳥尾山 80分／戸沢 10分）
シカにかじられた道標は、作治小屋・津々木さんが幾度も修理。



【NO-05】 丸みを帯びた尾根には草原が広がり、落葉樹林帯へと続きます。



【NO-06】 落葉樹林帯の入口付近



【NO-07】 水無川谷筋の後ろに、渋沢の街並みを見下ろします。



【NO-08】 浮石混じりの急な草付き斜面は、滑りやすい。



【NO-09】 見下ろす谷の先に、渋沢市街が広がります。

箱根



【NO-10】 浮石混じりの丸みを帯びた落葉樹林帯～降りにはよく滑る



【NO-11】 ここを抜けると、アッと驚く“エデンの園”へ



【NO-12】 草原の基部に立ち、シカが一番かじられている3番目の道標
(ロープの奥はコースを外れる)



【NO-13】 **エデンの園** (シュメールでは河口に広がる肥沃な草原を意味)



【NO-14】 大倉尾根越しに富士山が顔を出す



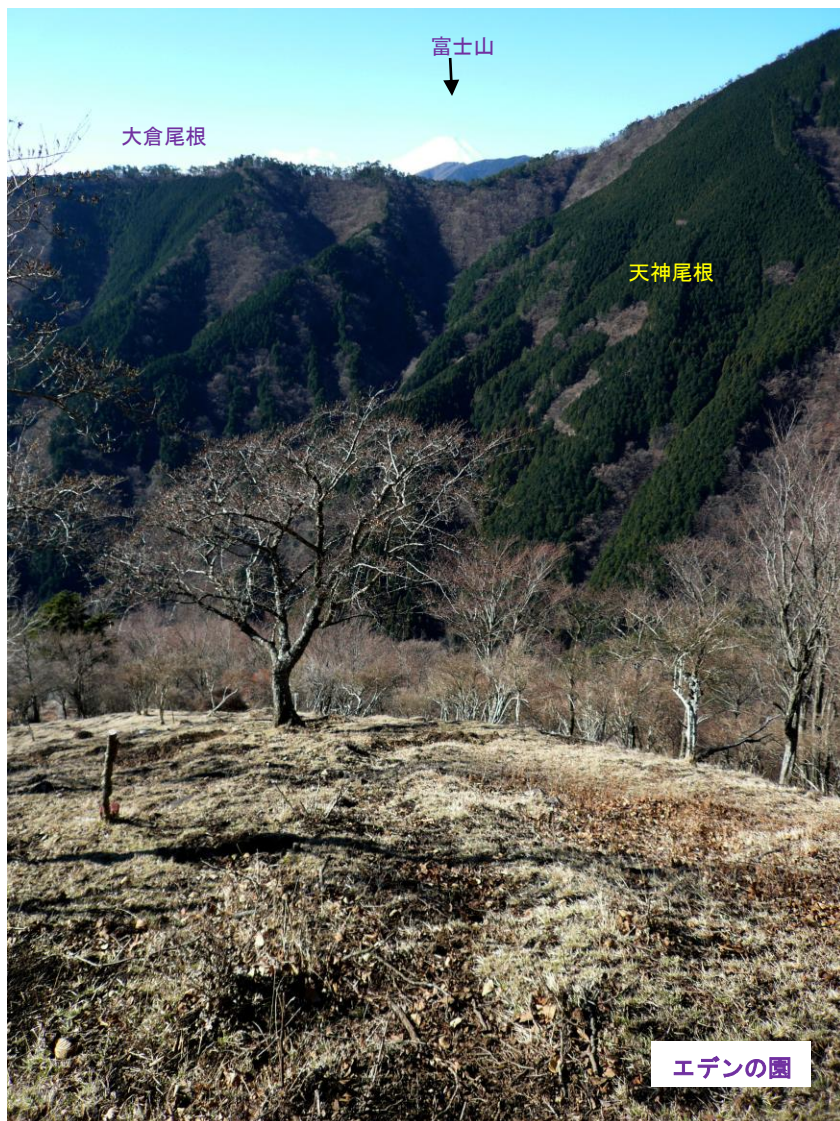
【NO-15】 **エデンの園** は山稜に囲まれ、宇宙のパワーを感じる！！



【NO-16】 富士山が次第に高く見えてきますが、写真は霞んでしまう。



【NO-17】 仲尾根随一の眺望～冬富士が一番美しい
登るごとに～富士山が大きく見えてくる
イノシシのヌタバ、シカの遊び場



【NO-18】 上部植林帯の入口



【NO-19】
上部植林帯の
プロムナード

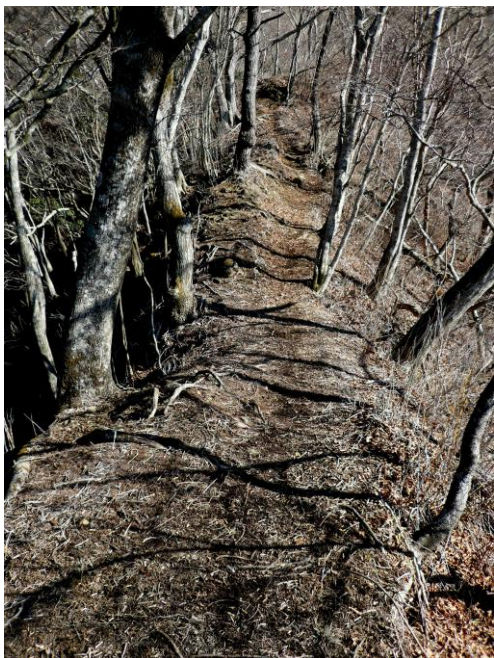


【NO-20】 植林帯を抜けると丸みを帯びた細尾根、右手は新茅ノ沢。



【NO-21】

細尾根右手は新茅ノ沢に切れ落ちる。新茅ノ沢を登り、最後の二俣を左手に登るとこの尾根に登り着く。もちろん、踏み跡など・ない、苔むしたルンゼを登るのだ！岩にへばりついた土が剥げ、岩に膝をこすって血がにじんだ。



【NO-22】 仲尾根が終る頃、富士山はますます美しさを増す。



【NO-23】 素人の腕で、富士山を美しく撮るのは難しい！



【NO-24】 カヤトの原に、ノイバラのトゲが肌を刺す！

“美しいもの”には“トゲ”が隠れているので・・・ご注意！！



【NO-25】 眼下に広がる仲尾根と植林帯、富士山は写真より大きく見える。



【NO-26】 眼下に広がる仲尾根と植林帯



【NO-27】 源次郎尾根にも上下二段の草付が見える



【NO-28】 烏尾山頂から塔ノ岳方面の眺望



【NO-29】 烏尾山々頂から富士山の眺望、肉眼はもっと大きく見える。



【NO-30】 烏尾山荘前はドロロンコ、しかし今は石畳みになっている。



2. 雪の仲尾根

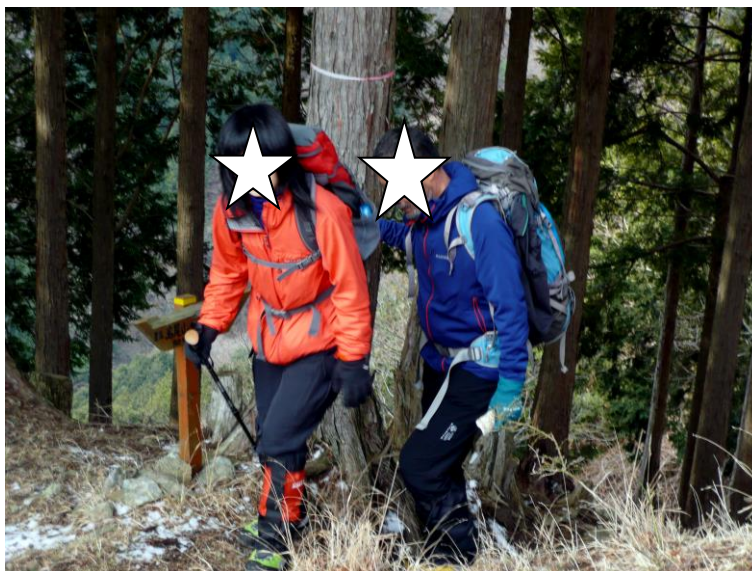
(2015.02.07) 定年退職後のご夫婦山行

【NO-31】

銀行を定年退職されたW氏。ご夫婦でゆっくりとした山歩きを楽しまれています。大倉から風の吊橋を渡ったベンチで、二度目の再会。今日は仲尾根を案内します。奥様の超スローペース歩行に合わせてゆっくりと、上部は雪があるので確実な歩行を試みます。



【NO-32】 取付きの植林帯を登り終え、第2の道標を過ぎる。



【NO-33】 枯れた“エデンの園”、今日は曇天の重苦しさがある。



【NO-34】

林道歩きでは、奥様を置いて
さっさと先を歩んでいたW
氏。ちょっとバリエーション
な仲尾根では、しっかりと後
ろからホローされている。

“エデンの園”からは、ちら
ほら残雪が現われ始めます。



- 【NO-35】 ストックで3点支持を図ると、バランスがとりやすい。
W氏は不要といわれるので、奥様だけにストックを貸し3本足。



- 【NO-36】 “エデンの園” に立ちご満悦なのですが、マスクングにて失礼！



【NO-37】

ストックの使い方を教えていません。

もっと上手な使い方がありますが、文字での解説は難しい。

実地指導はいずれまた！

※ 歩行用ストックは長めに設定し、手の代用として前方に突き、引き寄せて推進の補助とバランス確保に活用。

登降用ストックは短く設定し、重心より後ろに突きます。ストック天端に手の平を当て、身体を押し上げるようにバランスをとると、脚力補助に活用できます。

(高齢者向き)



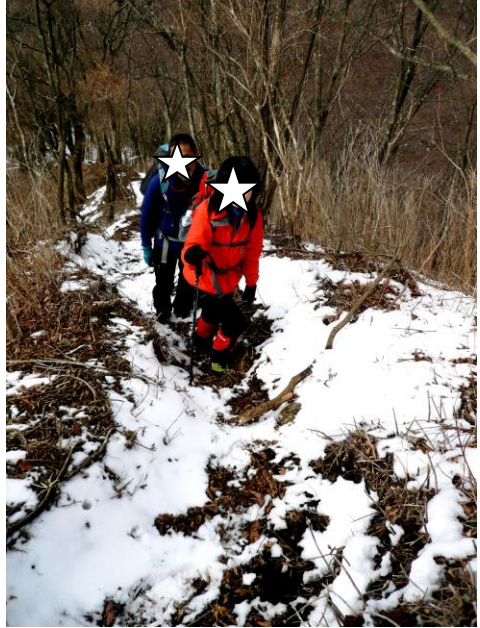
【NO-38】

上の植林帯を過ぎ、落葉樹林帯を登ります。

【NO-39】

落葉樹林帯は落ち葉の上に薄く雪が残ります。

落葉が滑らないように軽く靴を蹴り込み、ステップを刻んでいきます。



【NO-40】

登るにつれて残雪が増すと、雪面だけで体重を支えてくれます。

雪はまだ氷化していないので、アイゼンは着けず、キックステップで登ります。



【NO-41】

急なカヤトの尾根になり、
奥様はストック2本を使
い、4つ足歩行となり安定。



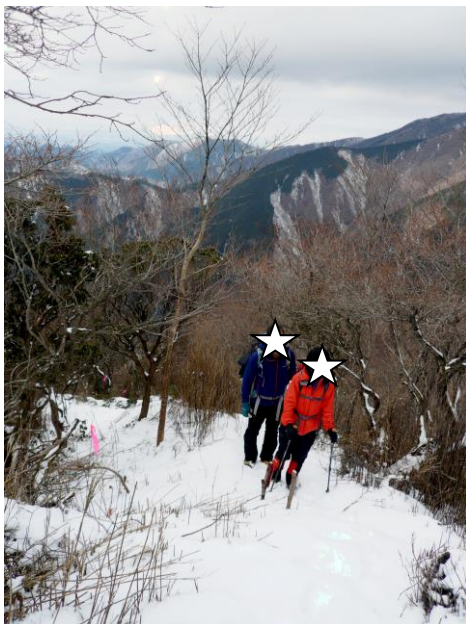
【NO-42】

湿気を含んだ雪質のため、
足下はさほど滑らない。
4つ足歩行は順調！



【NO-43】

後方西側から、どんよりとした雪雲が垂れ下がり、圧迫感を感じます。



【NO-44】 カヤトの尾根を抜け、山頂はもうすぐ！



【NO-45】 烏尾山山頂に到着



【NO-46】

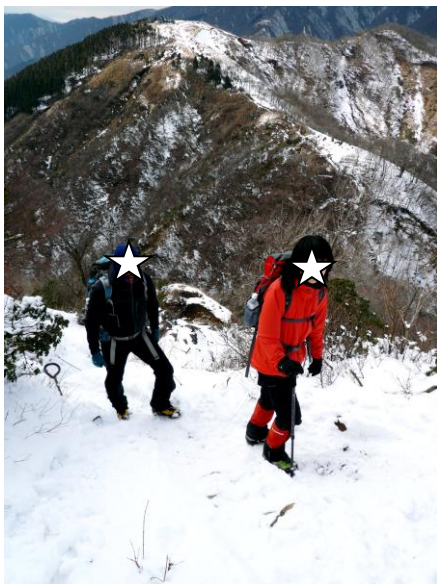
烏尾山側から、三ノ塔への
登り斜面。

アイゼンを着けるまでもな
く、キュッと締まった歩き
やすい雪質。

ただ稜線は、冷たい北西風
が吹き抜け、寒い！

今は木道階段となり、登山
技術はいらない、階段歩行
になってしまった。

過剰な整備は自然を壊す！



【NO-47】

三ノ塔へ登る岩場を通過。

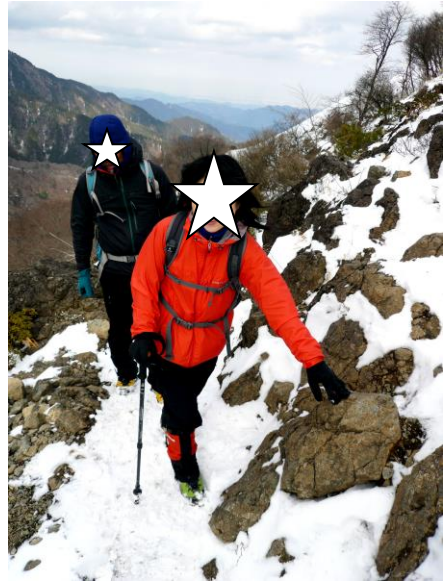
北西の冷風が吹き抜ける。

その後のW氏ご夫妻は、親の介護
で山は遠のいたそうです。

出来る時に、出来る事を、出来る
限りおこなう・・・。

しかし現実には、出来ない事のほう
が多い。

この雪の仲尾根が、ご夫妻の想い
出の一駒になったら、嬉しいもの
です。



【NO-48】

三ノ塔のお地藏さま。

衣装は、秦野市在住の高橋宏雄
氏ご夫妻が、季節ごとに衣替え
されています。



3. 冬の雨水樹 (2016.01.31) めずらしき雨水樹

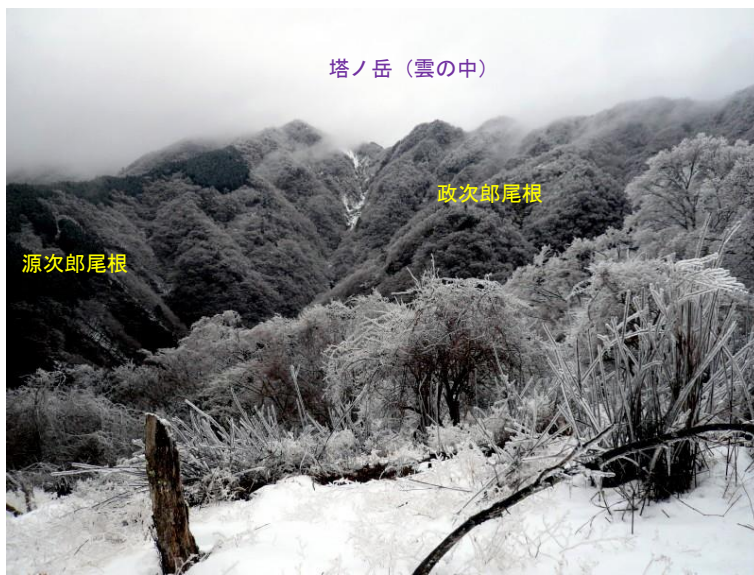
- 【NO-49】 冷～暖～冷の大気層から降った雨は、樹木に当たると氷結し
雨水樹となる珍しい現象。(P-107 あとがき：参照)



- 【NO-50】 “エデンの園” から望む、雪雲に隠れた塔ノ岳方面



【NO-51】 雪雲に隠れた、塔ノ岳方面。雪山を一人で歩くとさまざま危険を予知し、神経が研ぎ澄まされる。怖いけど、この緊張が私は好きだ！



【NO-52】 雨氷の重みで折れたばかりの枝、各所で枝折れが多発。



【NO-53】 烏尾山から三ノ塔に至る表尾根は、雨氷の垂枝が行く手をさえぎる。



【NO-54】 今日は、三ノ塔のお地藏さまも寒そう！



4. 快晴の冬姿 (2017. 01. 22)

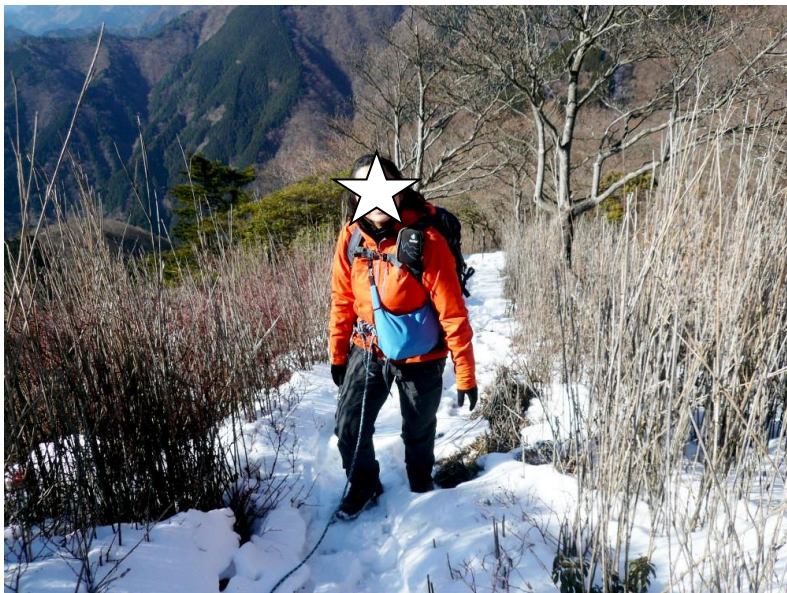
【NO-55】 雪のない“エデンの園”から望む塔ノ岳方面



【NO-56】 後方、大倉尾根の科尔から富士が顔を出す



【NO-57】 カヤトの尾根には雪が残り、ロープを結んで安全確保。



【NO-58】

肉眼で見る富士山は、写真よりも大きい！！

快晴の冬山絶景に溶け込むのは素晴らしい。何も見えない風雪の冬山は怖いけど、“なにくそ！”と負けず嫌いなファイトが湧き出す。

多様な顔を見せる自然の中で、人は同調と抵抗の矛盾した心を抱えている。

今日は、快晴の山に溶け込んでいればいい！！（同調の美学）

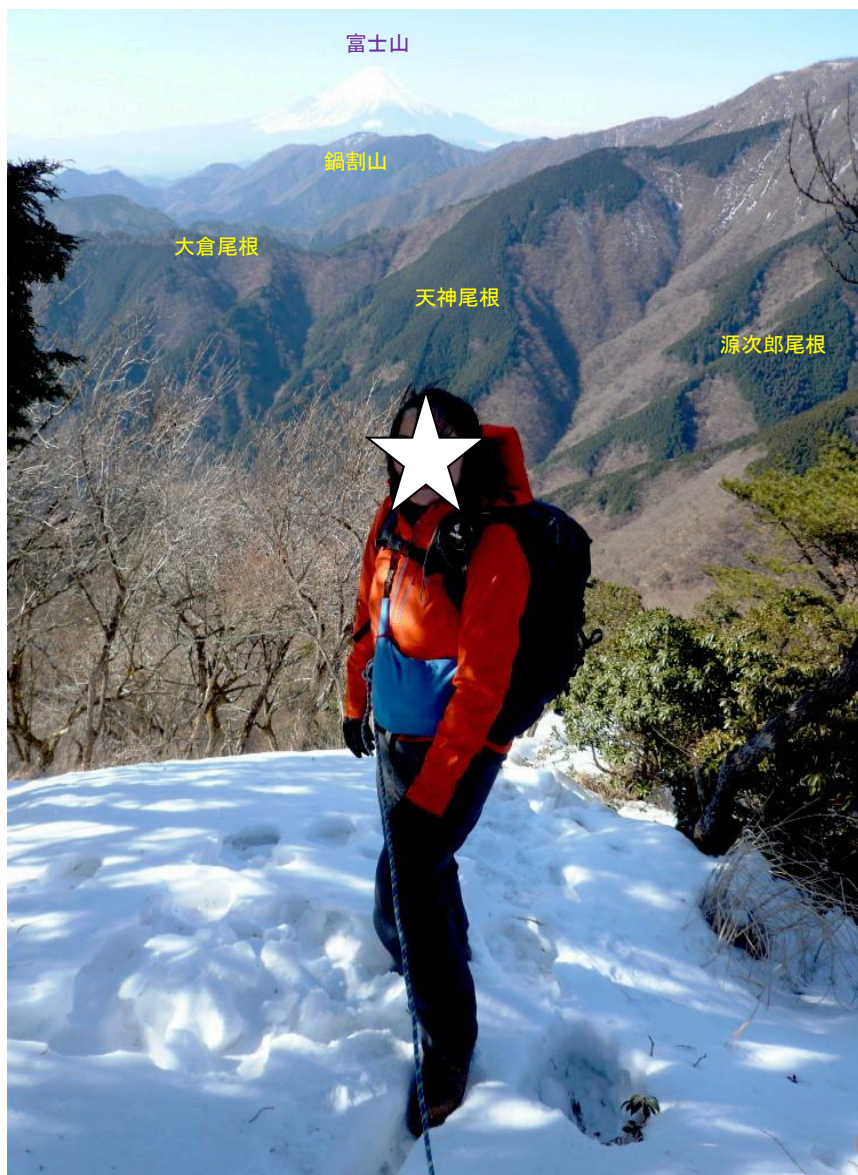


【NO-59】 快晴の冬景色は最高！！
満面の笑みも、マスクングにて失礼！

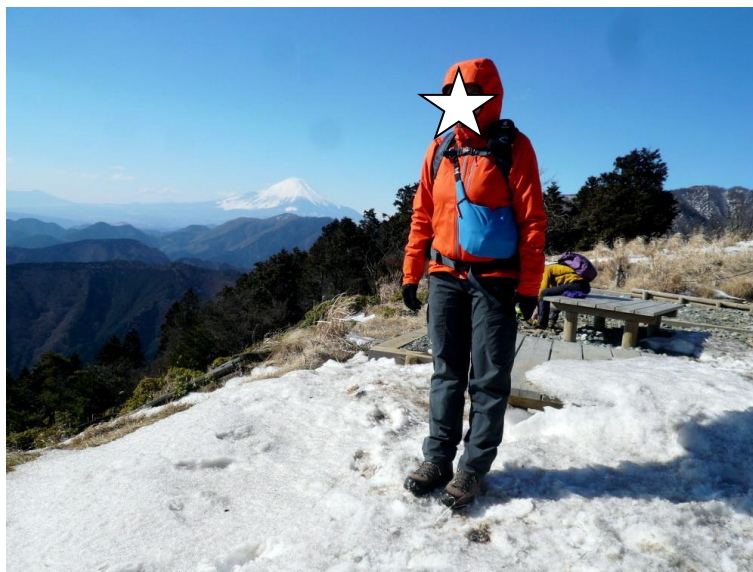


【NO-60】 烏尾山々頂は目の前、振り向けば最高なビュー！！

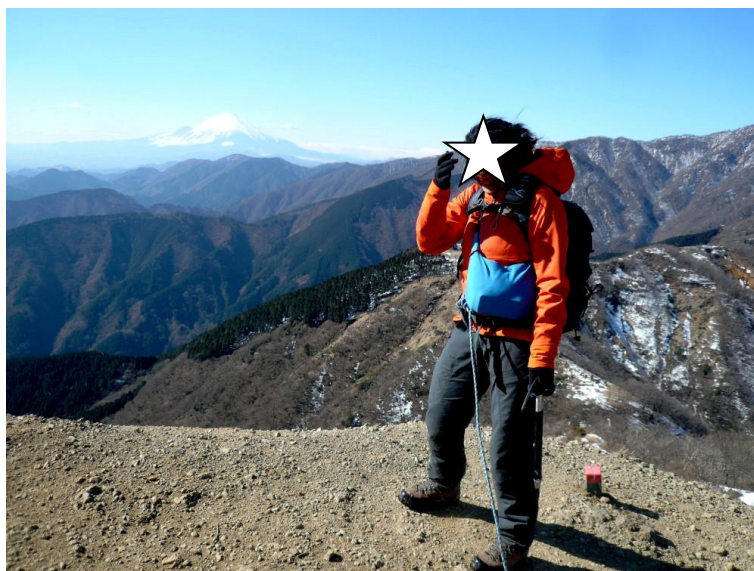
一級建築士のKさんは、冬の仲尾根からどんなパワーを得たでしょうか！



- 【NO-61】 烏尾山々頂、烏尾山荘前の広場、稜線は北西の風が強い。
ここはアイスバーンの時もあり、アイゼン装着したこともある！



- 【NO-62】 お地藏さまを過ぎ、三ノ塔山頂まであと少し。



5. アメリカ縦断途中で死亡した森田利佳さん

(2017.04.03 = 雪の三ノ塔で会おう)

昨年(2017年)7月27日の国内TVは、NHKをはじめとした各局一斉に、森田利佳さんアメリカでの死亡を報じました。電子新聞が、その後を追います。

7月24日、アメリカ・カリフォルニア州・キングスキャニオン国立公園内の標高約3,000mの川で、ハイカー・グループにより、川で沈んでいる遺体が発見された、と報じたのです。パシフィック・クレスト・トレイルを歩いているさなか、誤って川へ転落したらしく、事件ではなく、事故らしかった報道に、ほんの少しの安堵を覚えます。

森田さんは約半年をかけてアメリカ縦断を計画され、5月16日に日本出発、11月3日に帰国する予定でした。出発が夕刻(アメリカン航空16:25羽田発〜サンディエゴ行き)のため、昼食を有楽町交通会館の回転展望レストランでご馳走し、わずかな饞別を渡します。海外に出て、一番大切なのは生命、^{いのち}二番目がパスポート、その次はお金・・・と言って!



facebook

今も残る森田さんのフェイスブック

ログイン

アカウントを忘れた場合



追悼
森田 利佳

友達 写真 動画

森田 利佳さんの自己紹介

居住地と出身地

大阪市
居住地

三次市, 広島県
出身地

森田 利佳さんの自己紹介

表示するその他の情報がありません

好きな言葉

Life isn't about finding yourself.
Life is about creating yourself.

Where there is a will, there is a way.

早く行きたいなら1人で行け。
遠くまで行きたいならみんなで行け。

お気に入り

音楽



水曜日のカンパネラ

写真



他の写真を見る

似た名前を持つ他のユーザー

- 森田 藍
- 森田 智史
- 森田 早織
- 森田 洋平
- 森田 理菜
- 森田 賢一郎

森田利佳さんに出会ったのは昨年（2017年）**4月3日（月）**、雪の三ノ塔から烏尾山へ降る途中でした。雪がふくらんだ曲がり角に、一人ボンヤリと立ちつくしている姿に不安を覚えます。初春とはいえ、ドカ雪がしっかりと残る表尾根に、一見、高校生かと思間違うような装いが気になり、声を掛けてみます。返事の概要は、①＝アメリカ縦断のためにトレーニングで、大阪から来て赤羽に泊まっている、②＝表尾根を塔ノ岳まで登り、大倉尾根を降る予定、③＝雪山は八ヶ岳を登った経験があるが、丹沢は初めて、④＝山のほかにトレイルランニングの大会に出たことがある、⑤＝ヘッドランプ、ピッケル、ストックはなく、軽アイゼンだけの軽装備で、食料も少ない・・・等です。

3月末に降ったドカ雪は、丹沢の稜線に冬場よりも多く残り、水気が多くて重たい雪質です。出会った時刻は10：40頃、これから塔ノ岳～大倉尾根は夕暮れが予想されず。天候と、途中からのエスケープルートを知らない彼女に、私は次の提案をします。「私は次の烏尾山から仲尾根を下りますが、よかったら一緒にどうですか・・・」と。彼女は素直に受け入れます。三ノ塔から烏尾山への降りは急斜面のため、いつも私がザックに携えている6Φ10mロープを彼女に結びます。さらにアイスバイル（ピッケル+ハンマーの短いもの=写真NO-66で手にしている）を彼女に持たせ、私が先導して降ります。

【NO-63】 当日の三ノ塔から烏尾山～表尾根～塔ノ岳方面
（稜線は吹き溜って、膝下ラッセル程度）



平日月曜日のために
烏尾山荘は閉鎖。休むことなく、
仲尾根へと分け入ります。

ルートを熟知している私が先頭で降
ります。最初は膝までもぐる雪の急斜
面ですが、体幹バランスが良い彼女は、
難なく後ろに続きます。

さしたる困難もなく、雪がまばら
となった“エデンの園”に到着。
私が丹沢で一番好きなパワースポット！

【NO-64】 三ノ塔降り口にあるお地藏さま



【NO-65】 “エデンの園” から見える塔ノ岳方面と森田さん



【NO-66】 雪がまばらな“エデンの園”に立つ、手にしているのがアイスバイル。



【NO-67】 “エデンの園”に立つ私と降り方向（森田さん撮影）



当日（4/3）は月曜日なので、作治小屋は閉まっています。“丹沢の上高地”を見上げる外のテーブルに、残りの食料を出し分け合って食べます。

森田さんはグラフィックデザインを8年続けたが、適性とは思えず悩み続け、思い切って会社を辞めて、単身でアメリカ縦断に向かう決断をしたと話します。私はお節介ではありませんが、いろいろとあった私の人生経験談を、短い時間で彼女に語りました。デザイン＝設計のこと、結婚と離婚、ヒマラヤ遭難死亡事故、リスク・マネジメントとクライシス・マネジメントとのこと、再婚と子供たちへ伝えたいこと・・・等々。

途中から、涙を流して聞き入る彼女の姿からは、素直さと純真さが伝わってきます。そういえば、まだ残されているフェイスブックの「お気に入り」欄に、“孤高”を好む傾向を見つけて、納得できました。～それゆえに悩み、会社を辞め、アメリカ縦断に出掛けたんですね！一期一会でしかなかった森田さんとの交流でしたが、“真に幸せになってほしい”と願う女性でした！自分探しの旅の途上で逝去されてしまった彼女の足跡の一つを、実名と顔写真をマスキングすることなく、私の責任で開示しました。

《2017.04.03 22:08 のメール》 偶然の出会いにもかかわらず、田中さんの優しさに感動しました。一日で色々な学びをさせていただきました。リスクをちゃんと考えた行動を心掛けます。両親にもこまめに、計画をしっかりと話していきたいと思います。

《2017.04.04 15:47 のメール》 私の雑多な話の中で、しばし涙されていたあなたを見ると、女性らしい優しさの一面が垣間見られ、ぜひ幸せになってほしい人だと感じました。短い時間の中でいろいろな話をしましたが、アメリカ縦断に際しては、あなたの直感を第一に信じて行動、判断されることを願うものです。

私が最初にヒマラヤへ出掛けたのは28歳の時（1974年）でした。この時は、私の妻も一緒に、夫婦で本格的ヒマラヤ登山は日本人で初と、朝日新聞が全国報道をしました。しかし終わって帰国したところ、妻からは「離婚してほしい」という、思いもしない言葉でした。私は登山に集中していましたが、妻は私と別な夢を見ていたようです。最初のヒマラヤ登山体験は、私の頭をすっかりクリアーにさせ、理性、感性ともに極めて高揚した時であり、私は妻の申し出を冷静に受け入れました。

その哀しみの中から湧き出した勇気が、4年後(1978年)の再挑戦へとつながります。32歳でふたたび同じコースに挑戦しましたが、今度は3隊員死亡という、遭難体験でした。そんな哀しみの中で行ったエベレスト・トレッキング(私はコンダクター)で出会ったのが、現在の妻と難波康子さん(旧姓=田中康子=エベレスト日本人女性二人目の登頂者~下山中死亡)でした。33歳のあなたと、同じ時節の“自分探しの旅(ワンダラー)”でした。

それから約40年が過ぎた昨日、あなたと雪の丹沢で巡り会いました。同じような年頃で、未知なる体験を求めて旅立とうとされている貴女でした。昨日は短い時間の中でいろいろ申し上げましたので、理解できない事も多かったと思います。何よりも真実に直面することの大切さは、十二分に理解できます。昨日も申し上げましたが、『取り返しのつかない事態=クライシス・マネジメント』は避け、『取り戻すことができる事態=リスク・マネジメント』は慎重に判断されるよう、私の体験からお知らせできたら・・・と、思ったところです。何があっても、生きて帰るように!!!

真実を求めている人は、この世のどこかに存在します。いつか巡り会え、喜びが分かち合えたら最高です。苦難の末に巡り会い、一瞬で分かり合えた現在の妻と、私は40年を共にできる幸運に恵まれました。そんな私と雪の丹沢で巡り会ったあなたにも、ぜひ幸運が届くよう祈念するばかりです!!!

何かありましたら、いつでも、どこからでも、ご連絡下さい!!!
Good luck!、Good luck!、Good luck!

【NO-68】

アナグマ

作治小屋から大倉に向かう戸川林道の路傍に、足が傷ついたアナグマがいました。逃げようとしたのですが、声を掛けるとこちらに向きを変え、警戒しながら近づいてきました。(撮影=森田)



【NO-69】 秦野戸川公園のチューリップ畑、右手後方が三ノ塔



【NO-70】 秦野戸川公園のチューリップ畑、後方は塔ノ岳方面



《2017.04.10 12:40 のメール》 とても心のこもったメールをいただき、ありがとうございました。お返事が遅れ、すみませんでした。

とても壮絶な人生で・・・、辛い過去を乗り越え奥様と運命の出会い。そして70歳を過ぎてもパワフルに生きられる姿勢に、すごく惹かれました。わたしも、パワフルに、人生を前進していきたいです！

わたしは33歳という歳までずっと、朝から終電近くまで働き、職場ではただパソコンに向き合っているだけで一日が終わってしまう虚しさに、どこか心が疲れていました。その中で、29歳の頃に会ったのが、山でした。

初めて登った3月の赤岳で見た全ての景色に感動し、身体全体が開放される喜びを感じ、それから幾度も山へ行くようになりました。仕事の限界を感じていた去年、思い切って仕事を辞める決意をしました。プレッシャーを感じながら、辛くても我慢し続けると、どこかで感情が死んでしまいそうで怖かったんです。

なので、知らない土地で大自然に囲まれて、感情も感性も、気持を解放してあげたいと思い、アメリカ行きを決めました。田中さんの忠告を大切に、クライシス・マネジメントとリスク・マネジメントをしっかり意識し、直感を信じていこうと思います。

木曜日(4/6)の朝大阪に帰って来てから、疲れなのか風邪なのか、寝ても、寝ても眠気が抜けず、今日まで自宅でゆっくりしていました。落ち着いてから返事を書こうと思っていたら、こんなに日にちが経ってしまいました。

丹沢で、またお会いしたいです。あの日は本当に不思議な巡り合わせで、出会ったことに感謝しています。林道で出会った小動物が“アナグマ”だったとは、驚きです。田中さんも、元気で穏やかな春を楽しんで下さいね(^^)

《2017.04.03 三ノ塔～仲尾根に登ったわけ》 次頁礼状のように、4月1日(土)に日本山岳文化学会有志による、秦野戸川公園で20周年記念講演会を実施しました。併せて7万本のチューリップ鑑賞もおこなう計画だったのですが、丹沢はすっかり雪化粧。チューリップはまだ蕾状態でした。それならば雪の丹沢に登らぬ手はないと思い、2日後の4月3日(月)一人で三ノ塔尾根～烏尾山仲尾根に行ったわけです。

森田利佳さんの早すぎたご逝去に、魂のやすらかなること願い・・・合掌！！

秦野戸川公園開園 20 周年記念 特別講演会 ご参加への御礼

2017年4月1日(土)、天候を読み違えた3月末の寒波に、まだ蕾のチューリップ畑と、枯れ木のようなソメイヨシノの秦野戸川公園、開園 20 周年記念特別講演会にご参集いただき、誠にありがとうございました。

小雨まじりの中、出足に躊躇された方も多かったのではと思われませんが、やがて熱気を感じず視聴の雰囲気にも包まれ、①登山と山岳スポーツのちがいがい(田中文夫)、②スカイランニング世界選手権報告(岩楯夫妻)、③第1次～第3次南極観測と丹沢(中村純二)、3題の特別講演を56名の方々に視聴していただくことができました。

チューリップ鑑賞がままならない中、風の吊橋を渡った日本庭園「おおすみ山居」で、ゆったりと仕出し弁当と抹茶や生菓子をご賞味いただきながら、しばし談笑することもできました。今年94歳を迎えられる中村先生の、なお衰えを見せられぬ探求の道すがらを、後進の我らにお示し続けられますように・・・！ ご参加下さいました皆さまに、諸事御礼申し上げます。

2017年4月吉日：日本山岳文化学会・会員有志＝代表幹事・田中文夫



4/3：三ノ塔から塔ノ岳方面



6. 作治小屋祭りと霧雨の仲尾根 (2016.06.05)

【NO-71】

霧雨の中

作治小屋の安全祈願祭

作治小屋愛好会の皆さまと



【NO-72】 祝詞奏上



【NO-73】 前夜から一般参加者も加わる



【NO-74】 “作治小屋祭り”参加者（作治小屋愛好会会員と一般参加者）



【NO-75】 その後、一般参加者のSさん、Mさんを案内して、仲尾根を登る。



【NO-76】 初めて山を登るSさん、3月にマルガヤ尾根を案内したMさん



【NO-77】 お二人は映画関係のお友達。

初登山のSさんには、浮岩混じりの急な斜面が滑りやすい。



【NO-78】 霧の落葉樹林帯を登る



【NO-79】 芝が生え、“エデンの園”と呼べるようになる。



【NO-80】 霧雨の中、それでも“エデンの園”は浮き立っている。



【NO-81】 “エデンの園” に立つMさん（左）とSさん（右）

Mさんは北大で DNA 研究をし・・・、なぜか今は映画のスタイリスト。

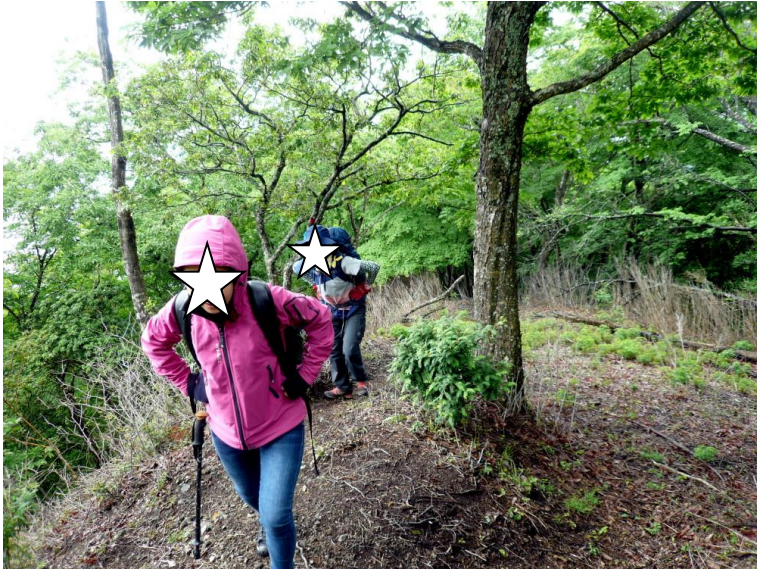
Sさんは山岳映画「岳」の主演女優＝長澤まさみのアシスタントを経験。



【NO-82】 上の植林帯を抜けるところ



【NO-83】 霧雨の中、上部の落葉樹林帯を登る。



【NO-84】

濡れるほどでもないが
霧雨の中、山頂間近なカ
ヤトの原を進む。
気温が下がり、肌寒い！



【NO-85】 もうすぐ頂上！



【NO-86】 烏尾山々頂 (1,136m)、Sさんは初登頂！



7. 春の草原（エテンの園）下降 (2018.06.09)

- 【NO-87】 新著＝『雑学 日本文明物語』がまとまると、気合が抜けました。
久しぶりにゆっくりと、三ノ塔尾根を登り、仲尾根を下ります。



- 【NO-88】 稜線近くには、まだヒルの気配がありません！



【NO-89】

新緑に真っ白な花が映えます。
私の鑑賞は分析的理解でなく、
“ワーキレイ！”で十分！
植物や花の名前を覚えることで
なく、山の全景に映えるその部
分の美しさが、ことさら愛おし
く感じます。

哲学的、物理的、論理的理解、
電気脳の対極にあります。

それゆえに、分裂気質にある
のでしょうが、山の全景はすべ
てをひっくりめて統合してくれ
る、総合世界です。



【NO-90】 クライマーの頃は見向きもしなかったものが・・・今は見える。



【NO-91】 山の景色に溶け込めつつある・・・・今の私。



【NO-92】 山に溶け込むと涙ぐんでしまうのだが、涙が出ないのは老いの証し！
やがて消え去ってしまう思い出への愛しさは・・・・今も残る。



【NO-93】 やがて消え去ってしまう・・・全ての生命（いのち）！

“ヒメウツギ”は今、白き輝きを山々に向かい放っています！



【NO-94】 人の生命、花の生命、動物たちの生命・・・そして生命の代謝！

日本の人々は、やがて消え去る生命に“はかなさ”を感じます！

“はかなさ”ゆえ・・・ことさら今に、愛おしさが増します！！

花言葉は“秘密”

“古風”

“秘めた恋”

“潔白”



姫空木

ヒメウツギ

【NO-95】 これまで枯れ木と見過ごしていたが、純白の花びらで身に纏うと
名前を調べ、“ヒメウツギ”と確認する・・・この知性の愚かさ！



【NO-96】 “エデンの園”にポツンと独り立ちする“ヒメウツギ”
全景と部分・・・今にも消え去りそうな“はかなさ”が、愛おしい！！





【NO-97】

K Aさんは大樹と抱擁し、大樹の言霊ことだまを感じるといいます。

しかし私はまったく、言霊ことだまを感じるできません。大樹の波動に同調できない感性不足か、知性偏重か？

同期、同調、調和、そして発振・・・！

いつしか、そんな時がくるのだろうか・・・？

【NO-98】

知性を磨いたホモ・サピエンスは、もう一方の感性が衰えてしまったとするならば、未来をどのように受け止めれば良いのでしょうか？

目に見えるものだけを相手にするのではなく、目に見えない世界の中から、何が見えてくるのか・・・？

そのヒントは、翌週登った次頁、霧の草原（エデンの園）にありそうです！！



8. 霧の草原（エデンの園）登る (2018.06.17)

【NO-99】 エデンに咲くヒメウツギ、一週間で花びらの多くを落とします。



【NO-100】 大樹の波動を感じられなかった私でも、霧のベールにくるまれた森からは、神秘的な波動が気にかかります。頭上の霧にわずかなシルエットを写し、シカが2頭走り抜けていきました！



【NO-101】 シカが走り抜けた霧のエデンを振り返る。



【NO-102】 1週間前のヒメウツギから、花卉はほとんど散ってしまった。



【NO-103】 誰もいない静寂な霧の中を植林帯に向かうと・・・・・・・・
谷筋からは“ピューウ”っと、シカの交信が聞こえます。



【NO-104】 霧が立ち込め、幽玄な植林帯に耳を澄ませる。しかし老いた耳は
いつもセミが鳴き（耳鳴り）、幽玄の波動にチューニングできない！



【NO-105】 植林帯出口・・・初めてここに来たとき、シカのカップルに出会った。



【NO-106】 植林帯を抜けると、落葉樹林の丸尾根となる。



【NO-107】 周囲が明るく拓け、表尾根一帯が見えるのだが、今日は濃霧！



【NO-108】 丸尾根を登る右手は、新茅ノ沢に切れ落ちる。



【NO-109】 霧の中に咲くヤマボウシ（山法師）



【NO-110】 ヤマボウシ拡大（ミズキ科）・・・花言葉は“友情”
・・・お相手はハナミズキ 花言葉は“返礼”だそうナ！



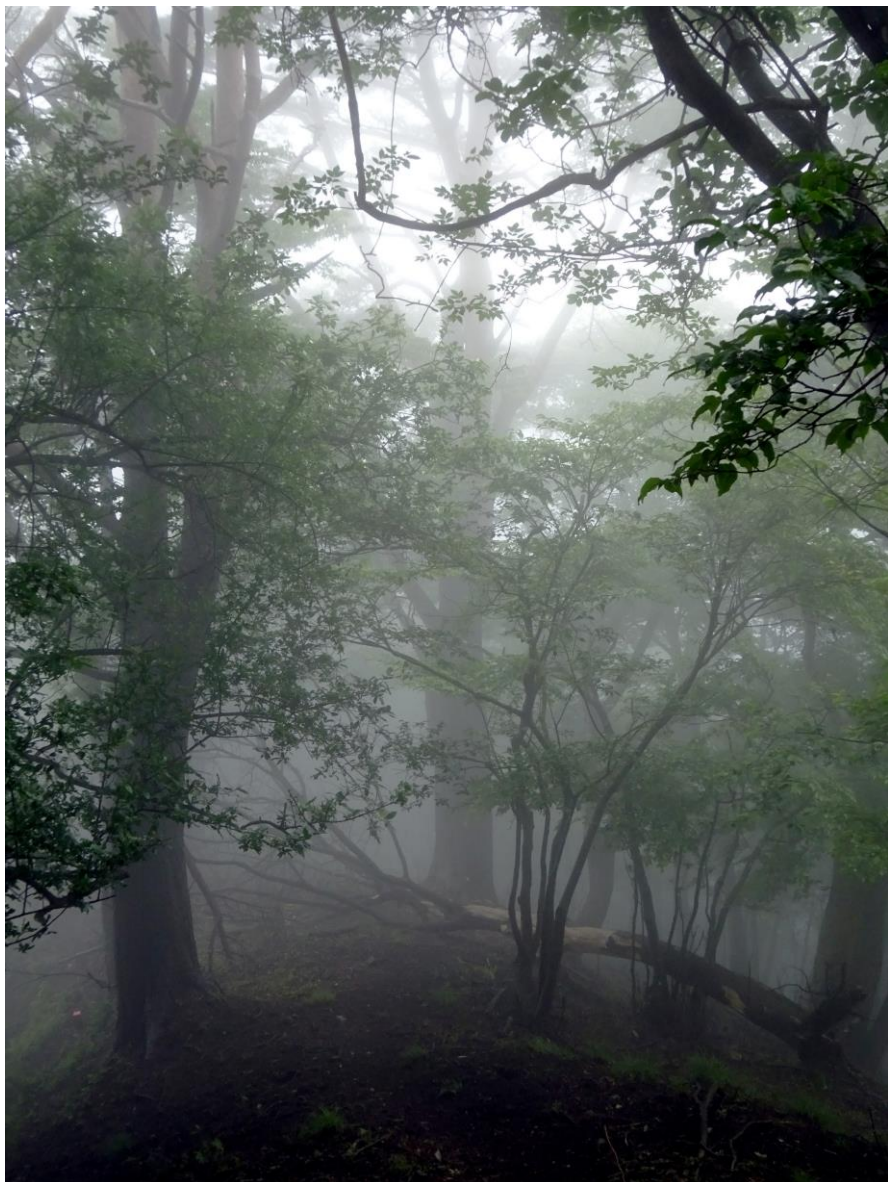
【NO-111】 新茅ノ沢へ切れ落ちる部分（中央左）を通過して振り返る。



【NO-112】 霧の中で頑張っている老木、倒れそうで・・・倒れない！
でも、やがて倒れる・・・自らの姿が重なる！



【NO-113】 霧に立ち上がる赤松と、昨年倒れた倒木が歩行を遮る。
霧の中から言霊^{ことだま}は・・・、やはり聴こえない！
無理に聴こうとする意識が、邪魔しているからなのだろう！



【NO-114】 2年半前（2016.1）に雨氷で折れた枝【NO-52】
それでもまた、小枝を延ばして葉が茂る生命の力強さ！



【NO-115】 ノイバラ、別名＝ノバラ（バラ科） 花言葉＝“素朴な愛”



【NO-116】 ???



【NO-117】 稜線直下カヤトの斜面に咲くヤマオダマキ（キンポゲ科）

花言葉＝“協調性”よりも、“断固として戦う”の方が合っているかも！



9. 小学5年生親子を案内 (2015.07.12)

【NO-118】 小学5年生のK君親子と同年代老人KD氏も飛び入り参加。



【NO-119】 エデンの園に立つ



【NO-120】 同世代のKD氏は、烏尾山荘まで同行



【NO-121】

2015年6月6～7日の作治小屋祭りに参加したK君親子。帰りの戸川林道で一緒となり、仲尾根を案内する約束をしました。

戸川林道で車に乗せてくださったKD氏も、烏尾山まで同行することに。



【NO-122】 植林帯を過ぎ、落葉樹林帯を登る



【NO-123】 蒸し暑さの中、烏尾山荘で食べるカキ氷は最高！
タオルを巻いて気づかなかったお母さんの首筋は、ヒルに喰われて出血！



【NO-124】 烏尾山荘の三木さんと、Tさん、K君



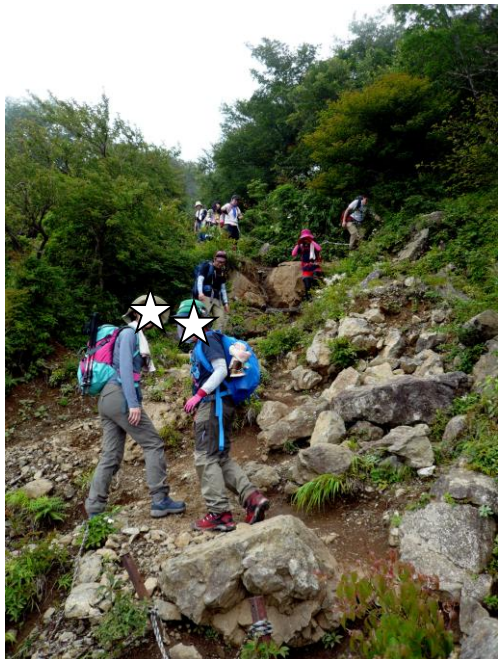
【NO-125】

三ノ塔への登り

下って来る表尾根縦走者と

すれ違います。

(コンニチワ！)



《2015.07.12 23:13 のメール》 何から何まで、本当にありがとうございました。
今日はぐっすり眠れそうです。明日の朝、筋肉痛がどれほど出るのか・・・運動不足なので怖いです。Kは満足して寝ました。また行きたいという気持ちになっているのは、田中さんのおかげです。

仲尾根は、丹沢の魅力がぎゅっと詰まった、素適なルートですね。教えていただいて感謝です。滑りやすい斜面の登り方や、靴紐の締め方、いろいろな山の基本は、目からウロコで勉強になります。またいろいろなお話を伺い、自分の考え方や価値観の小ささを実感しました。うまく表現できませんが、考えるきっかけをいただきました。

・・・（省略）

《2015.07.13 10:46 のメール》 お疲れさまでした。田中さんのお誘いで、仲尾根を登ることができました。ありがとうございます。Tさん親子も、田中さんのご指導で、満足されたことでしょう。（KD氏より）

《その後・・・》 Tさん親子は夏に上高地へ行きたいとのことで、上高地～岳沢～前穂高岳の計画を立てます。およそ20年前、私の次男坊が小学5年生のとき、同級生2名をともなって、同じコースを登っていたからです。

その前にTさん自身が運動不足ということで、マルガヤ尾根～源次郎尾根下降を案内。8月24～26日の3日間で、新宿（バス）～上高地～岳沢～前穂高岳往復を計画し、バスの予約も済ませました。

そんな折、熊本に住むTさんのお父様が、急な体調不良となります。奇しくも穂高計画1カ月後に急逝され、もはや山行どころでなくなりました。K君は穂高に登れなくて不満タラタラだったそうですが、急遽、上高地往復バスはキャンセル。

Tさんは熊本県宇城市出身。横浜国立大学卒業後は相模原に住み、町田市役所に勤務されていました。Tさん親子の不幸は、さらに続きます。翌年（2016）4月14日、熊本地震が生家を襲います。お母様を残されていたので、Tさん親子は相模原の住まいを引き払って、実家へと戻られた様子・・・。

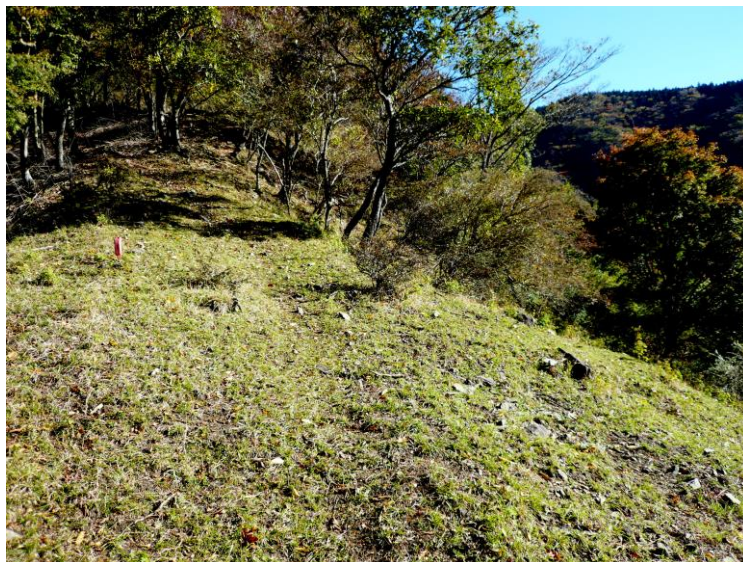
どうか、幸せな日々を願うばかりです！！

10. 晩秋の仲尾根 (2014.11.15)

【NO-126】 表丹沢の紅葉は、11月に入ってからです。



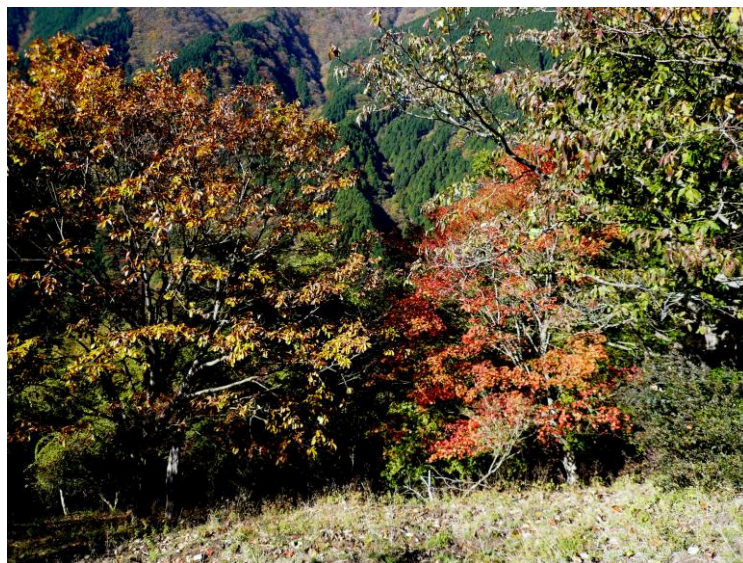
【NO-127】 紅葉の進行は、気温や日照具合によって異なります。



【NO-128】 落葉樹林帯も、最後の活躍時！



【NO-129】 落葉樹に混じり、モミジがひとときわ艶やかです！



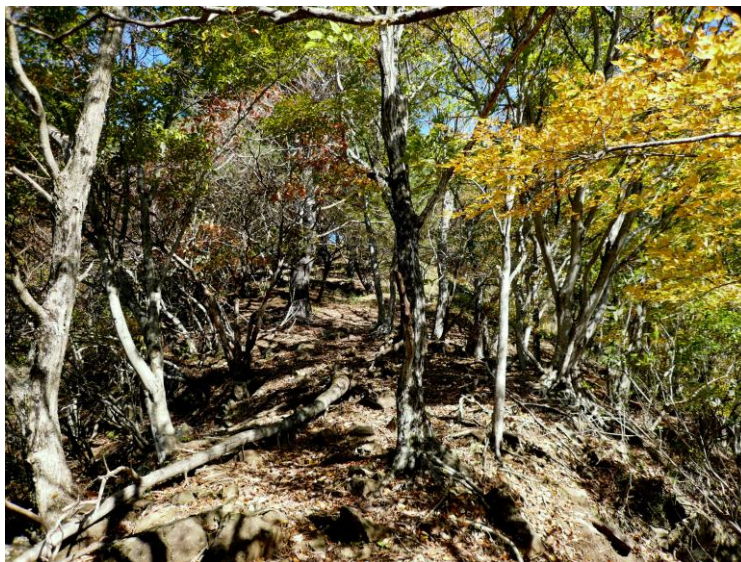
【NO-130】 赤と緑は補色調和、お互いを引き立て合う相乗効果！
男女の関係にも似て、適度に相補的であると・・・イイ！！



【NO-131】 アインシュタインは相対性原理をとえます。
ニールス・ボーアは相補性原理をとえます。
両者の統合は、複素数（実数+虚数）原理です！！



【NO-132】 電気脳な私は、美しさを分解して理解しようとしています。



【NO-133】 しかし山にいと、分解は面倒となります。



【NO-134】 “美しさに浸る” こと・・・、ただそれだけでイイ！！



【NO-135】 山にいる時は・・・、感性の非日常世界！



【NO-136】 難しいことは・・・、理性の日常世界で考える！



【NO-137】 このオン / オフが、人生を実りあるものにしてくれる！



【NO-138】 複素数原理とは = 理性（実） + 感性（虚）の統合方式。

それはまた = （文明 + 文化 = 実相） + 意識（虚相）

〈見える世界〉 〈見えない世界〉



【NO-139】 あるがままを、そっくり受け入れられる心の広さと喜び！！



【NO-140】 食べることは、ホモ・サピエンスの基本的欲求！

植林帯手前の台地でランチ (別な日=2016.11.12のUさん)



【NO-141】 最高の展望と陽だまりは、テントの外で食べる方が快適！

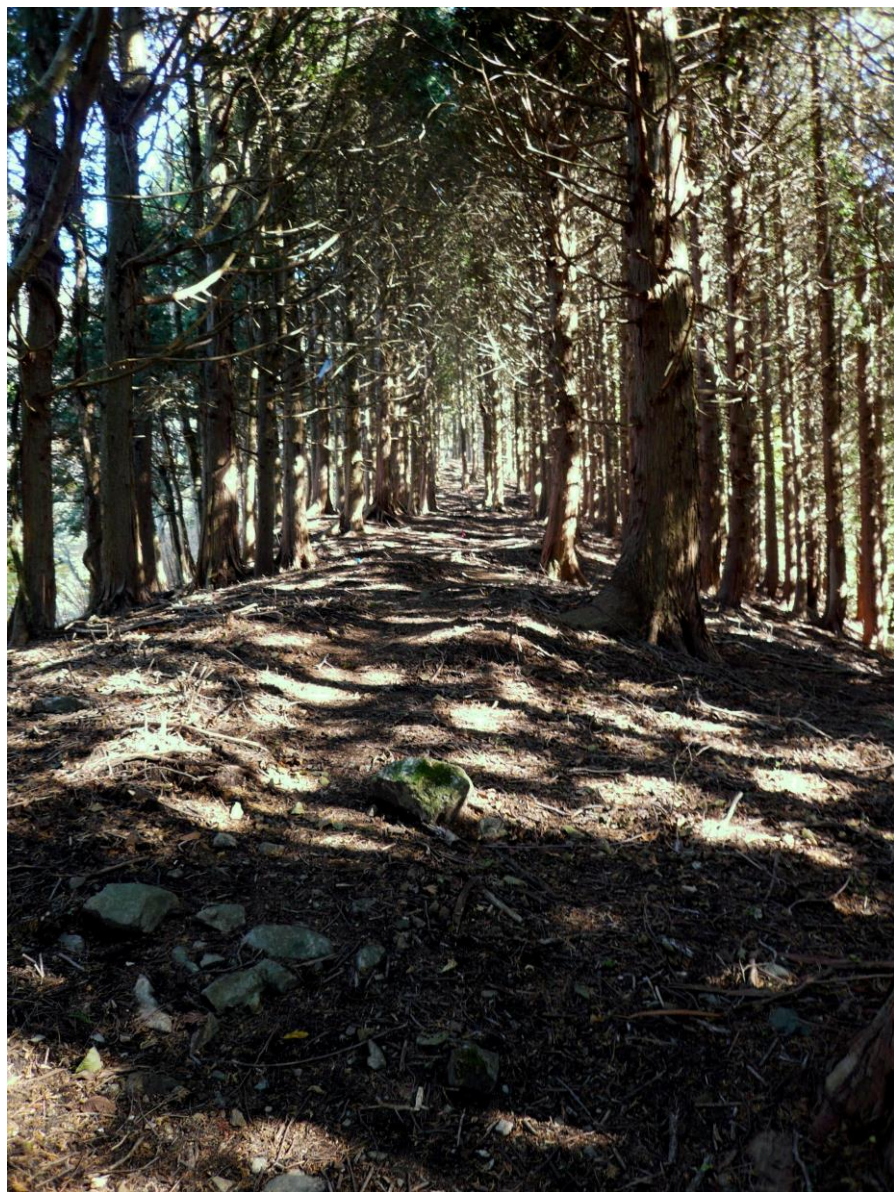
風が強いのでテントの中でコンロを炊こうと考えるが、外で何とか使用できた
(別な日=2016.11.12のUさん)



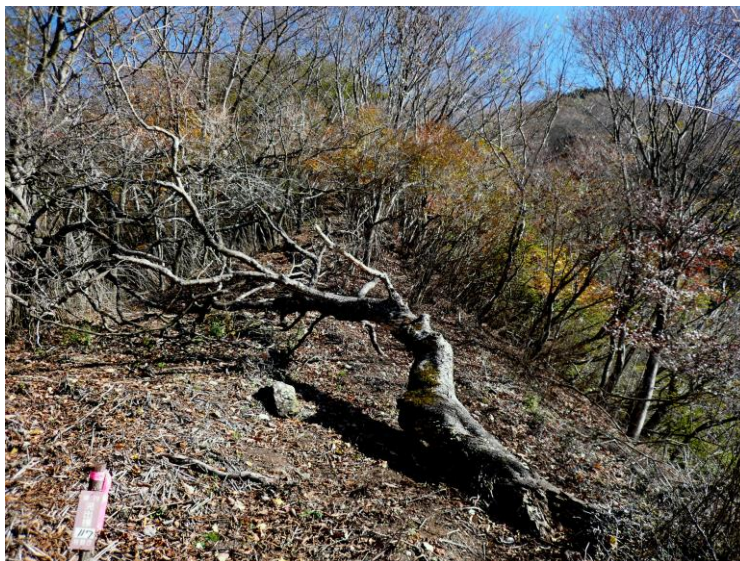
【NO-142】 富士山に雲がかかり、風はますます強くなる！



【NO-143】 晩秋の植林帯プロムナードに、下手くそなメロディーをロずさみます。そう、一番の苦手が、音楽と図画だから！！



【NO-144】 シカが朽ちたような倒木、4年経た今は原型をなくしました。



【NO-145】 山頂直下のカヤト原、4年経た今はトレールで削られました。



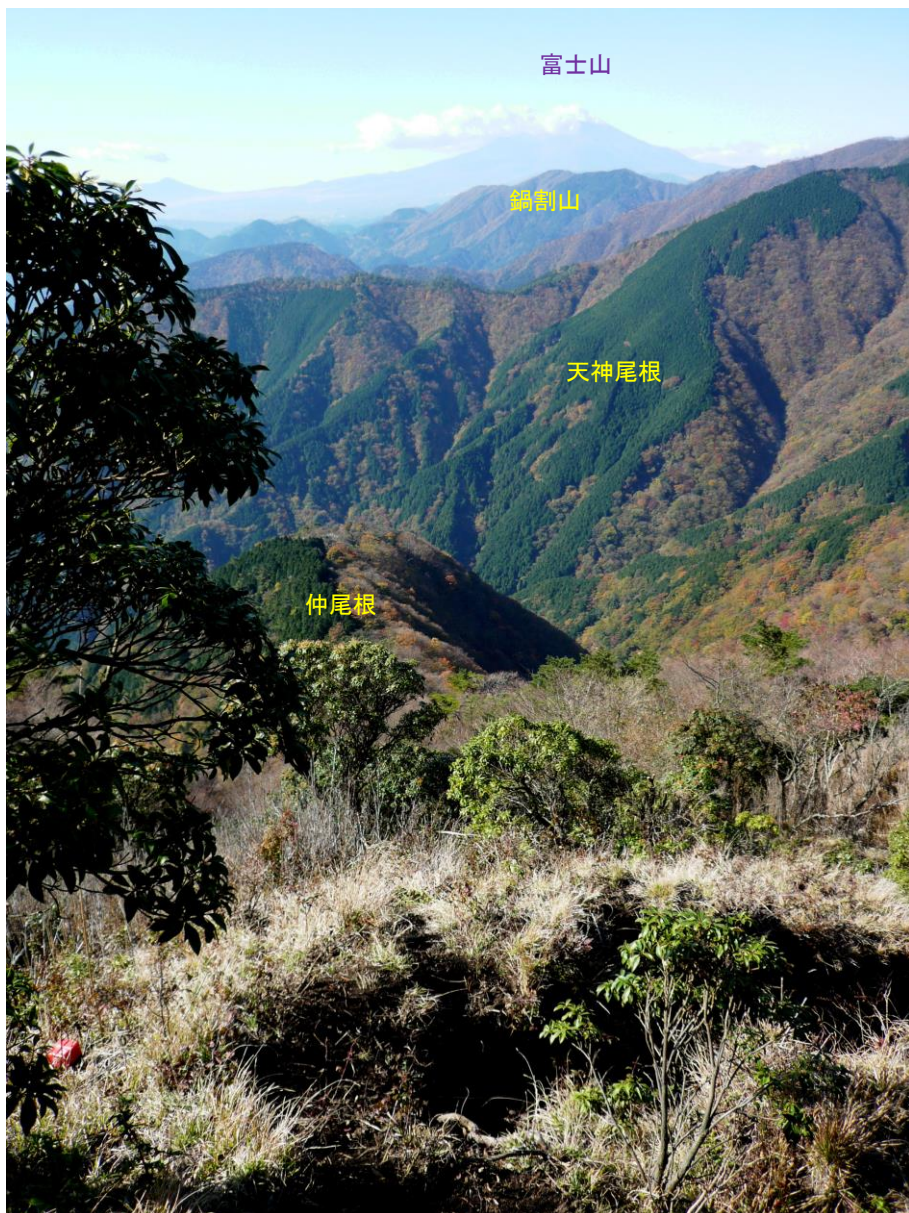
【NO-146】 中央部の樹木は、2016.01.31【NO-52】雨氷で折れる前の立姿。



【NO-147】 山頂直下から見返す仲尾根



【NO-148】 山頂直下から見返す仲尾根は、短いながらも変化が凝縮されます。
一人で登降すると、いつも人生の縮図が交錯して憂いを覚えます。



【NO-149】 海の潮風が大好きなUさん。山の風も・・・またイイそうな！

(別な日=2016.11.12のUさん)



【NO-150】 仲尾根の終了点=烏尾山々頂



11. 初秋のタマゴ茸 (2015.09.06)

【NO-151】 仲尾根上部～落葉樹林帯の落葉から生えるタマゴ茸



【NO-152】 タマゴ茸 = 高級イタリア、フランス料理の食材



【NO-153】 根元の土中、タマゴの白身で覆われたような中から生まれ出る。

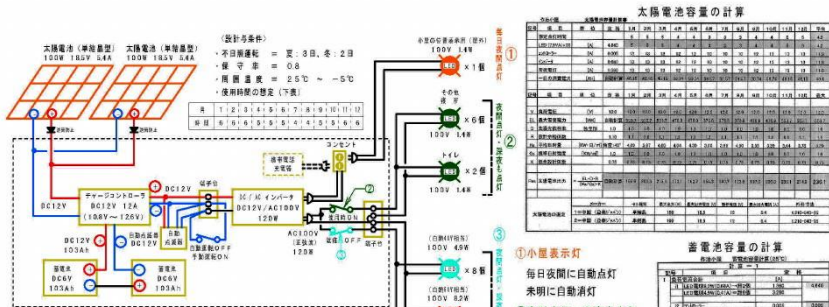
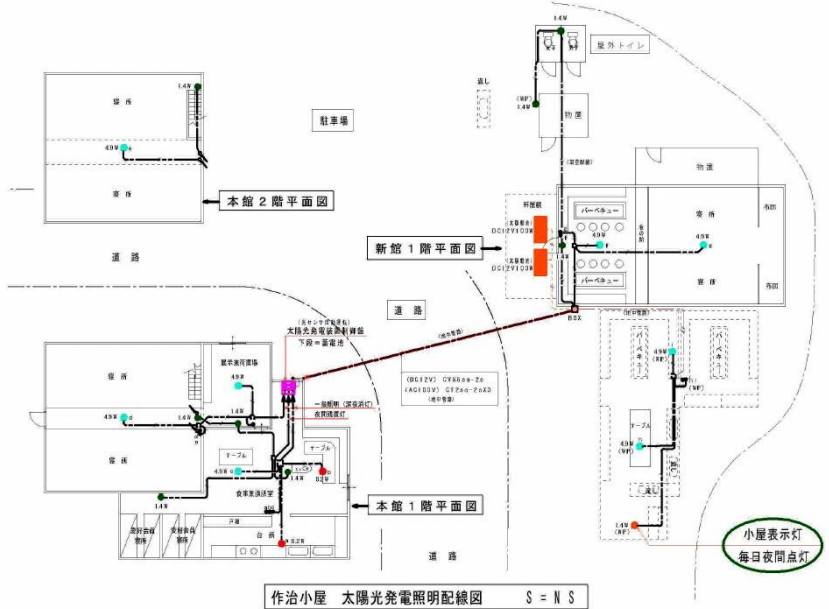


【NO-154】 根元にタマゴの白身部分があるのだが、土中に埋もれて見えない。



12. 作治小屋の太陽光発電LED照明 (2017年6月)

作治小屋 太陽光発電照明の設計概要



(設計 = 建築設備士・田中 2017.06)

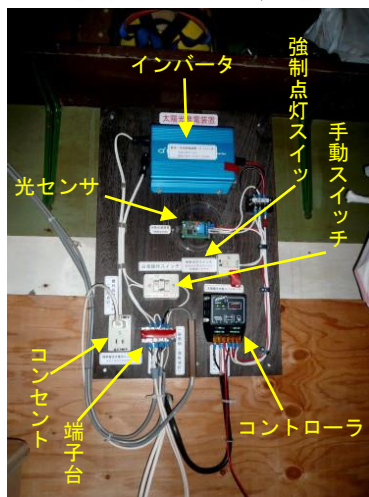
電気技術者の間で、山小屋に太陽光発電が適していることは、常識です。

私はその問題点を整理し、すでに2004年の日本山岳文化学会第2回大会で発表。2005年11月発行の論集第2号で論文発表しています。当時は青色発光ダイオードの裁判問題でLEDの開発が遅れ、価格が高騰したままでした。それから13年が過ぎ、中国製品は価格低下をもたらせ、お金のない山小屋でも、ボランティア設置が可能となりました。作治小屋・津々木さんのつづきを聴き、資材総額≒15万円（労務奉仕）で、作治小屋に設置することができました。

【太陽電池パネル 100W×2=200W】



【手製組み立て制御装置】



【本館リビングのLED照明（調光可能）】



【本館台所のLED照明】



日本山岳文化学会有志「山岳文化講座と作治小屋の夜」

2018. 04. 07~08



新館で
山岳文化
講座



私が所属する日本山岳文化学会では、会員有志によって 2014 年 2 月以来、秦野戸川公園パークセンターでの講演会や、日本庭園＝おおすみ山居で憩いの場を設けてきました。講演の中心は、東京大学名誉教授＝中村純二先生と奥様によるものでした。中村先生は第 1～3 次南極観測隊員でもあり、東京大学スキー山岳部長や日本山岳会副会長を務められました。その中で特に印象深いのは、南極犬＝タロ、ジロ物語の当事者であり、日本初のオーロラ観測やほうおう座流星群発見・命名等々、貴重な体験談を聴講することができました。

今回も「ムスタンの旅」を講演予定だったのですが、94歳の体調を崩され、急遽中止となりました。中村先生ご夫妻の資料は、作治小屋の展示コーナーに沢山掲示されています。

山岳文化講座

4月7日 14:00 ~ 18:00

- ① 登山の分類と山岳スポーツとのちがい (会員=田中文夫)
- ② スカイランニングについて (会員=岩楯岳一、岩楯志帆)
- ③ 今年2~3月のアンナプルナ・トレッキング (事務局長=中岡 久)
- ④ 昨年7月のチベット・トレッキング (会長=酒井國光)



作治小屋特製 シロコロホルモン



朝の餅つきが一番の楽しみ



作治小屋の太陽光発電 LED 照明を祝う集い

〈中村純二先生ご夫妻を招いて〉

2017年7月22～23日



あとがき

烏尾山仲尾根 は、表丹沢で私の一番のお気に入りルートとなりました。

最初に登ったのは2014年11月27日。以来2018年6月末日までの3年8カ月の間、季節を問わず**43**回登降した記録があります。平均すると、31.6日に1回となるので、毎月1回登降したことになります。

気の短い私が飽きることなく続けられるのは、以下に要約できます。

- ① 最短距離で烏尾山へ至る直線コースであり、しかも変化に富んでいる。
- ② 変化に富むとは、植林帯、浮石混じりの落葉樹林帯、芝状草原帯、急峻なカヤト尾根。それら四季の変化は飽きることがなく、ナイーブな女性のような！
- ③ 下の植林帯を抜けると眺望が良い。**エデンの園**と名付けた草原からは、三ノ塔尾根～表尾根～塔ノ岳～大倉尾根に囲まれた、屏風のセンター。加えて、大倉尾根越しに見える**富士山**が見事。真上から陽光を浴びる**エデンの園**は、パワースポット。
- ④ 2016年1月22日に登った“**雨氷の仲尾根**”はこれまでの登山経験になかった現象。雪が付着して氷化する“霧氷”は一般的だが、過冷却状態の雨が樹木に当たって透明に氷化する“**雨氷**”は、これまで経験になかった。密度の高い氷化であるために重く、樹木の枝や幹を折る。【N0-52】参照

【雨氷の条件＝地上気温は0℃から-数℃、 上層に適度な逆転層（適度な暖層＝雨 / 冷層＝氷）地上は冷雨が降り、物体に当たると氷化する珍しい現象】

- ⑤ 仲尾根末端に作治小屋があります。登っても、降りても、作治小屋に顔を出し、四方山話は尽きません。

より高く、より困難な登山をめざしていたかつてのアルピニストは、70歳を過ぎて“**老化や病魔**”と仲良く暮らしています。生業なりわい [糊システム・デザイン]を終えて丹沢に還ると、山を通した人々との交流に、新たなる境地が見えました。わずかに残るフロンティア・スピリットは、まだ私が“**生きている証し**”なのでしょう。人間統合要素（心・技・体）から、“**心＝知性**”の伸びしろが、まだ少し残っている気がします。生来の分裂気質は、半世紀にわたる山岳体験が救ってくれました。今、抵抗の美学（登山）は統合の理論体系化へと向かい、日本文明研究から人類統合モデルを探っています。

< 著作一覧 >

- ◆ ● 青春のヒマラヤに学ぶ 文芸社、2001.01.01
- ◆ ● 頂きのかなたに 日本文学館、2003.08.15
- 若き日の山々 私製版、非売品、2014.08.15
- 老いの道標 私製版、非売品、2014.06.10
- ◆ 登山の総合人間学 私製版、非売品、2015.12.07
- ◆ 登山の生態分類(学) 私製版、非売品、2016.08.30
- ◆ 山の空気 森のざわめき 私製版、非売品、2017.01.16
- ◆ 山と美の終焉 私製版、非売品、2017.11.02
- ◆ 雑学日本文明物語 私製版、非売品、2018.06.07
- ◆ 印は国立国会図書館蔵書
- 印は公共図書館蔵書

< 主要登山歴 >

- ・1964.04 丹沢の沢登り(滝郷沢)から登山を始め、1年間丹沢の沢を登りまくる
- ・1965.04 コンテニューアスクラブ(東京都岳連)に入会し、国内の主要な岩壁を登る
- ・1967.12~1968.01 日韓親善東京登山隊(東京都岳連)=ウルサンバイ初登攀
- ・1969.03 「山岳同人・風」創設(横浜山岳協会)代表、積雪期の岩壁を登る
- ・1974.02~06 横浜山岳協会 ナールヒマラヤ P29 南西壁登山隊(申請=隊長)
- ・1975.11 「ツラギの会」創設(横浜山岳協会)代表、再びP29 南西壁をめざす
- ・1978.07~10 ツラギの会 ナールヒマラヤ P29 南西壁登山隊(隊長)
氷河崩壊雪崩によりC2で遭難、3隊員死亡(9月14日)
- ・1978.12~ ネパールヒマラヤ・トレッキングでコンダクターを多数務める
- ・1981.08 子育て前に夫婦でアルプス登攀(アイガー、マッターホルン、他)
- ・1983.12~1984.01 ツラギの会 ナールヒマラヤ コンデ南稜冬季登山隊(隊長)
- ・1988.07 山岳会主宰を止めて設計業務に専念、個人山行で国内外の山へ
- ・2014.09 株式会社システム・デザインを閉鎖し、著作と丹沢へ還る(健康登山)

田 中 文 夫

1946年3月

神奈川県平塚市四ノ宮生まれ

神奈川県立神奈川工業高等学校：電気通信科卒業

1965.11～1968.3：神奈川県立秦野高等学校：

理科実習助手時代から独学を始める

専門分野 = 建築設備士（電気）

2003年から**中村純二**博士（東京大学名誉教授）に師事

日本山岳文化学会 正会員

総合人間学会 正会員

烏尾山仲尾根物語

作治小屋とエデンの園

著 者	田 中 文 夫
発 行 日	2018年7月7日
制作発行	横浜市旭区東希望が丘 23-1 田中文夫、私製版
頒布場所	作治小屋
頒布価格	¥ 1, 5 0 0 -